OVERWATCH®

STONE BY STONE

作 CHRISTIE GOLDEN

STONE BY STONE

作者
CHRISTIE GOLDEN

イラストレーション
NESSKAIN

シンメトラ：マランマ –
スキン＆オリジナルコンセプト
ARNOLD TSANG

シンメトラ：マランマ – モデル
DONALD PHAN

シンメトラ：オリジナルモデル
RENAUD GALAND

レイアウト＆デザイン
MARK BRYNER

日本語版編集
NOZOMI OSHIMA

ストーン・バイ・ストーン

「……ちょうど地震が起きた、なんてことはないな？」

サンジェイ・コーパルが期待を込めて尋ねた。サティヤ・ヴァスワニは比喩のつもりだろうかと一瞬考えを巡らせたが、そんなはずはない。ヴィシュカー・コーポレーション屈指の交渉人であるサンジェイは、そのままの意味で言っている。

「地震活動は一切ありませんでした」

主任地質学者のハリタ・パテルが答える。

「だからこそ、あの場所を掘削地に選んだのです。当時警告した通り——」

「都合よく地震が起きた、その可能性もないと？」

ハリタはみるみる困ったような表情になっていく。

「残念ですが、理由ははっきりしています。今回の事態を招いたのは、私たちが開発を急ぎ、一気に進めすぎたためです。集中的な建設工事による振動が直接の原因です。住民のみなさんは…… 大変お怒りです」

サンジェイはため息をついた。

「向こうに足がかりを作るのに、我々はずいぶん時間を費やしてきた。リオの件からそう経っていないのに、これは困りものだな」

“向こう”というのは、ロシャーニを流れる川の向こう側にある広大な未開発の土地。“我々”というのはもちろんヴィシュカー・コーポレーションのことだ。“困りもの”はサティヤの目線の先に映し出されているものを指していた。

テーブルの上に小さなホログラムが浮かんでいる。とある場所のかつての姿と現在の様子がサティヤの前に交互に映し出される。最初は大きな蓮の花の上に足を組み、胸の前で手を合わせたオムニックの石像が、それから——頭のない石像の下半身と、その周りに転がる岩塊が。

「困りものどころか——」

広報担当のタミール・チャダが口を開く。

「契約全体に影響を及ぼしかねない事態です。物理的な損害だけじゃない…… サンジェイの言う通り、今回の件は侮辱だと受け取られるでしょうね。しっかり対処をしなければ、この地域での開発から手を引かざるを得なくなります」

サンジェイはサティヤの方に向き直る。

「幸い、ヴィシュカーには世界一の硬質光建築技師がいる。サティヤ、君はスラヴァサに似た、小さな村の生まれだ。もちろん、やってくれるね？」

サティヤに断る選択肢がないのは明らかだった。

「急ぎで取り掛かってもらわなければ——」

タミールが「直ちに。今すぐにでも！」と口を挟む。

「――機会を逸してしまう。スラヴァサの住民に、我々も大事な石像を破壊してしまったことで酷く動揺しているのだと印象づけないと」

私たちが動揺しているのは、そんなことが理由ではない。そう思ってもサティヤは口に出さなかった。ヴィシュカーではよくあることだ。

「さっそく現地に向かい、住民の要望を聞き出してくれないか。瞑想院を建てて欲しいだとか、修復のためにまとまった資金が欲しいだとか―― こちらで寺院の再建そのものを請け負っても構わない。どんなコストも、開発権を失うことに比べればすずめの涙だからな」

幼い頃のサティヤは、“すずめの涙”や“棒に振る”とった慣用表現を不思議に思っていた。どうやってすずめを泣かせるのか、棒なんて振って何になるのだろうと。大人になった今となっては…… そう、会話の“流れに身を任せる”ことを学んでいた。

「これは誰を模した石像だったの？」

サティヤはそう尋ねながらホログラムに向き直り、折れた首と地面に落ちた頭部から視線を逸らす。なんという無秩序だろう。

「あー……」

サンジェイは質問に即答できず、曖昧に濁しながらタミールの方を見る。

「オーロラです」

メモを確認した上で、タミールが言葉を継いだ。

オーロラは、知覚を持った最初のオムニックだ。彼女は自らを犠牲にして、全てのオムニックに知覚を与えたことで知られている。

「オーロラはただ有名なオムニックという訳ではない。住民はおそらく、金銭は欲しがらない。それ以上の提案をしなければ」とサティヤ。

「それを突き止め、実現するのが君の仕事だ」

サンジェイはサティヤに温かい微笑を向けた。そのまなざしは優しい。

「君ならできる。そのためなら何をしても構わない」

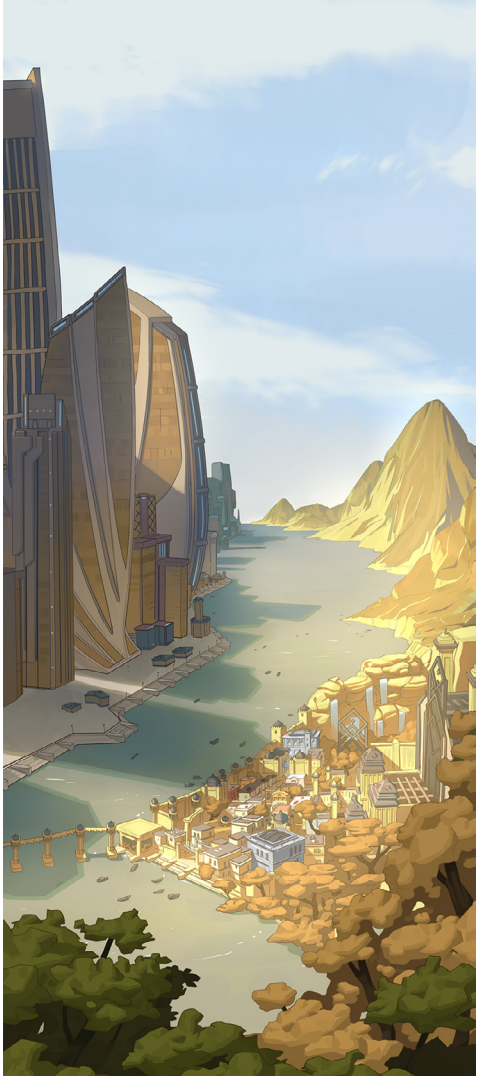
「金輪際、ヴィシュカー・コーポレーションとは関わりたくない。こちらはもううんざりなんだよ」

スラヴァサのサーパンチ、即ち村の長であるラネシュ・グルーワルは言い放った。

サティヤが寺院を訪れることやその目的がいつの間にか知れ渡っていたらしく、少人数ではあるものの、グルーワルを筆頭に不満げな集団が彼女を待ち受けていた。地元住民とサティヤは、寺院の入口近くの中庭に立っていた。碁盤格子のタイルで覆われた中庭には陥没が見られる。コーラルピンクの石壁が影を落とすところもあるが、太陽の光は彼らの頭上に容赦なく降り注いでいる。寺院の黄金のドーム型建造物がギラギラと光を反射し直視できない。グルーワルの表情には怒りが深く刻まれ、他の人々も同じような表情を浮かべている。集団の後ろの方にはオムニックの姿も見える。彼らがこちらを怒鳴りつけてこないだけ幸いと言うべきか。

「今回の件で、私にできることがあれば力になりたい」サティヤは言った。

「できること？ 青い硬質光の高層ビルでも建てるつもりか？ 我々がそんなことを望んでいるとでも？」



「あなたがたの望みは分からない」

グルーワルの問いかけに、サティヤは率直に答えた。

「そうだろうとも！」

「ヴィシュカーは俺たちのことなどどうでもいいんだ！」他の誰かも叫びを上げた。

「私にとっては決してどうでもいいことではないわ」

サティヤは反論する。砕けて首を失った石像の姿が、頭から離れない。

「せめて、寺院に入れてくれないかしら？」

サーパンチがたじろいだのを見て続けた。

「ここは全ての者を迎え入れる場所でしょう」

集団の後ろの方に佇んでいた、質素なローブを纏ったオムニックの一人が寺院に向けて腕を伸ばした。サティヤは会釈をして、木製の扉を潜る。背中に住民の怒りのこもった視線が突き刺さるようだ。

寺院の中はろうそくで灯され、外に比べてかなり涼しい。内壁は外壁のような温かみのあるコーラルピンクではなく、魚や虎の浅浮き彫りで装飾されている。振動により所々が崩れ、石があちこちに転がり、壁や天井にはヒビが走っていた。

かすかな匂いが鼻腔をくすぐる。まるで、ここで焚かれていたお香の香りが石に移ったかのようだ。その香りは、サティヤの幼少期の幸せな思い出を蘇らせた。時折、平穏な寺院へ連れて行ってもらうことがあったのだが、それはごくごく稀な出来事で、今までそのことをほとんど忘れていたほどだ。

「確かに君は我らの望みを理解していない」

人間のものではない、金属質な声が響く。黒板を引っ掻くような不調和な音でありながら、根底には穏やかさが宿る声。見ると、寺院に入る許可をくれたオムニックがサティヤの横で歩調を合わせていた。

「相手をよく知らなければ、決して望みなど分かり得ないものだ」

「あなたはここの僧侶？」

「ただの巡礼者だ。私はゼニヤッタ。ヴィシュカーが責任を取ろうとするのは慈悲深い行為。だが真に役に立たなければ…… その意味は成さない」

「ぜひとも役に立ちたいわ」

二人は廊下を進み続ける。

「君さえよければ、我らの文化、信仰、そして人々について理解する機会を用意しよう。しばらく我らと共に滞在するといい」

「滞在って？ ここに？」

思わず強い口ぶりで応じてしまう。サティヤの記憶に、子供の頃に直面した絶望的な貧困の記憶が蘇る。ひどい悪臭に、密集した人々。常に空腹で、濁った水を飲んで暮らした日々…… そして、貧しい暮らしから脱することができない両親の無力さ。

「そう、他の巡礼者と同様、この寺院に」

「私は巡礼者ではなく、建築技師よ」

サティヤは仕事をするためにここに来ている。彼らにはそのことをしっかり理解してもらわなければならない。

ゼニヤッタは金属でできた腕を持ち上げ、肩をすくめた。

「巡礼者とは聖地へ赴く者のこと。その言葉にとらわれる必要はない。ここに滞在するかを決めるのは、サティヤ・ヴァスワニ、君自身だ」

ゼニヤッタの言葉に、サティヤは不安になった。彼女は毎日、秩序と平穏を維持するためルーティンに従った生活をしている。ホテルに泊まるときだって、一人の時間を作り、できるだけ普段通りに行動する。

「君は建物の役割に合った設計をすると評判だ。この寺院の役割を知らないことを恥じる必要はないぞ、ヴァスワニよ。最初から全てを知る者などいない」

反論はできない。確かにオーロラの存在自体は知っているが、オムニックたちほど彼女のことを深く理解しているとは言えない。サンジェイが瞑想院や金銭で手を打とうと言った時、サティヤは直感的にそれではだめだ、と分かっていた。ゼニヤッタの誘いを断らなかったのも、やはり同じ直感のだめだった。

「そうね…… そうしてみる」

「やってみようという精神が、全ての冒険の始まりだ」

廊下は、曲がりくねった小道に通じていた。木陰が実に心地よい。オムニック僧が二人に近づき、サティヤに丁寧に会釈してからゼニヤッタに一礼をした。

「平穏を、テカルサ」

僧はゼニヤッタに告げ、歩み続けた。やり取りを目にしたサティヤは、まじまじとゼニヤッタを見やる。

「まるで指導者ね。ただの巡礼者ではなかったの？」

ゼニヤッタは、反響するほどの笑い声を上げて言った。

「ここには、指導者といった者は存在しない。私は師であるテカルサ・モンデッタの教え通り、瞑想するために戻ったばかりであった。だがここで君と出会ったということは、どうやら私には他の役目があるらしい」

「モンデッタのことは聞いているわ。殺されたのでしょう？」

サティヤのあまりに率直な物言いにもかかわらず、ゼニヤッタは動揺する素振りもなく「そうだ」と答えた。

「事件が起きるまで、オムニックが死ぬことも知らなかった。機械だから、パーツを交換できるんだと思いこんでいたわ」

「理論上は可能だ。だが、魂の代わりになるパーツは存在しない。それは人間も…… オムニックも同じこと」

そもそも、オムニックに魂はあるのだろうか？ この大きな疑問への答えは、すぐには出てきそうもない。サティヤはそのことは改めて考えることにして、話題をモンデッタに戻した。

「暗殺されたと聞いているけど、理由がわからない。暴力行動を扇動していたわけでもないのに」

「モンデッタは暴力を憂いていたのだ。暗殺の理由については、彼が人間とオムニックの間に橋を架けようとしていたからだと考える者が多い。かくいう私もそうだ」

「橋を……？ ああ、なるほど。てっきり本物の橋のことかと」

「私も最初は言葉通りの意味だと勘違いしていた。オムニックは人間同様の知覚を持つが、人間の感覚は分からないことばかりだ。君たちは“手を貸す”だの“舌が回る”だの言うだろう？ 金属製ならまだしも、生身の手を貸す方法について想像したり、人間の舌は取り外し可能な構造をしているのやも知れんと思考を巡らせたりして、大変だったものだ」

サティヤが笑いながら自分は今でもそうだ、と告げると、彼はピカピカ光る顔を彼女の耳元に寄せ、私もだ、と秘密を共有するかのように囁いた。

小道の先にあったのは、明らかに本堂であることがわかるドーム状の空間だった。

かつて石像が置かれていた高座は小さな池で囲まれ、石像の元に通じる細道が作られている。そこにいる巡礼者はほとんどがオムニックだが、人間の姿も見える。彼らは石像と同じ――正確に言えば、かつての石像が取っていたのと同じ体勢で、座布団の上に座している。

サティヤは瓦礫を眺めながら心がざわつくのを感じた。無菌室のように清潔なヴィシュカー・コーポレーションの役員室で、小さなホログラムを見るのとはわけが違う。目の前に鎮座する石像は想像以上に大きかった。砕けた腕と、割れた頭を眺める。ヴィシュカーは現場が片付かぬうちに、急いで自分を送り込んだのだと気づいた。

「神様がこんな姿になって、さぞ悲しかったでしょう」

サティヤの言葉にゼニヤッタは優しい口ぶりで返す。

「オーロラは神ではない。彼女は我らとなんら変わらない…… ただ、最初の存在であったというだけだ」

サティヤは周りに散乱する石の破片や埃ではなく、石像の顔に意識を集中しようとした。

「祈りを捧げないの？」

「うむ。我らは彼女の人生と…… 死を振り返り、その犠牲と命がけの贈り物に感謝する。石像は彼女の姿を正確に捉えたが、本質は捉えていない。オーロラは好奇心旺盛だった――いつでも世界と、そこに住む人々のことを知りたがった」

「何が人間を…… 人間たらしめるのか、知りたかったのね」

ゼニヤッタは頷く。

「オーロラはオムニックで初めて、その問いに苦しんだ。今でも、我らが時折苦しめられるように。オムニックは皆、自分にはどこかオーロラに似た部分があると考えている」

分かるわ、とサティヤも心の中で呟いた。オムニックとして、突然自我に目覚めるというのはどういう気分だろうか？ 全てを…… 理解しようと、考えるものか？

「前例がない上に手本もないのでは、相当苦労したでしょうね。彼女の…… あなたたちの考え方は、きっと私たちとはだいぶ違うでしょうし」

「誰かを尊重したり、愛したりするのに、その者の思考方法を理解する必要はないのだ」

ゼニヤッタはさらに言葉を続けた。

「あるいは、友にだってなれる。この寺院は一切の偏見なく、ありのままのオーロラを受け入れ、歓迎した」

「それでも…… 彼女はここを出ていった」

そうだ、と答える金属のように響くゼニヤッタの声は悲しげで、微かに頭を垂れた。

「オーロラには別の運命、別の旅が待っていた。その後、彼女が進んだのと同じ道を歩む者も多くいる。この寺院は、彼女に感銘を受けた者たちが歩む巡礼路の最初の宿場。知っていたか？」

「いいえ」

「オーロラは、新しい場所を訪れ、新たな出会いを果たすたびに成長していった。彼女の旅はネパールで終わりを告げたが、精神は遥か彼方まで到達した。他のオムニックも知覚を持てるやも知れないというほんの僅かな希望に賭けて、自らを犠牲にできるほどの無我の境地だ」

「待って…… 知覚に目覚めるかどうか、分からなかったの？」

サティヤは驚きを隠せず、声を上げた。どんな形であれ、自己犠牲の精神は高潔だ。だが、オーロラは自らの命は必ず断たれると知ったうえで、確証のない道を選んだ。これ以上に勇敢な人物を、サティヤは知らない。

ゼニヤッタは頷く。

「結果は誰にも分からなかった。その試みの途中で彼女が命を落とし、オムニックが知覚を持つ未来が潰える可能性もあった。そんな彼女の石像が、君の会社の開発事業によって破壊されてしまったことに、どうして我らがここまで心を痛めているか分かってくれただろうか」

「ヴィシュカーは人々の未来のためにある」

会社のスローガンが口をついて出る。

「今まで多くのプロジェクトに関わってきたわ。家を作り、安全な飲み水を確保して、病院を建てた」

――それからリゾートホテル。会員制クラブ。超高層ビルの中の超高級コンドミニアムも……。

「そうだろう。だが人々の役に立つ方法は一つではない」

「あなたたちが納得するということが大事なの」

念のため、サンジェイの案もゼニヤッタに提案してみる。

「瞑想院を作るとか、寺院を新しく建て直すことだってできる」

「我らは誰でも迎え入れるが――」

そう言うゼニヤッタの視線は彼女ではなく、壊れた石像に向けられている。

「――私は美しいもの、真なる精神で作られたものが、聖域から観光地へと変わり果てていくのを幾度と

なく見てきた。ここに来るべき者は、やがてたどり着く者。道は、歩む者の足元に少しずつ作られていく。寺院を建て直すと言ったが…… 現在のこの寺院も立派に役割を果たしている。新しいものは確かにエネルギーに満ちているが、古きものには力が宿るものだ、サティヤ。たとえ、それが脆い力だとしても。この寺院で深い瞑想状態に入ると、千年以上に渡ってここで交わされてきた無数の言葉が聞こえてくるような気がするのだ」

――無数の手が愛を込めて捧げた、香の香りも。

柔らかな鐘の音が、サティヤの思考を遮った。

「ああ！ 昼食の時間だ。君の滞在を開始するのに丁度いい」

ゼニヤッタは首をくるりとサティヤの方に向け、相手の表情を正確に読み取る。

「ここに滞在してもらうことを提案したが…… 君を悩ませていることは申し訳なく思う。我らは日々を規則正しく暮らすことで、平穏と目的を維持しているのだ」

「私もよ…… 自分の習慣通りに過ごせれば」

サティヤはなるべく礼を失することがないよう注意しながら答えた。

「君が不安を感じつつもこのプロジェクトに取り組んでくれることは、我らにとって喜ばしいことだ。案外、我らの習慣が性に合うかもしれないぞ？ さほど難しくはない。心と精神を満たしながら、肉体に仕事を与えるものばかりだ。それはさておき…… まずは君の胃袋を満たさなければ」

食堂に入ったサティヤは、立ち止まった。タマリンド、ターメリック、クミン、カルダモン―― 様々なスパイスの香りが寺院を満たす香の芳香と合わさり、強烈な郷愁を誘う。食事は米と豆、野菜、チーズ、そして牛乳で作られたシンプルながら美味しい菜食料理だ。オムニックたちは当然のことながら料理を口にしないにもかかわらず、味は絶品だった。

「どうして食べることができないはずないのに、美味しい料理が作れるの？」

「この世界には、僧が料理の味見をすることを禁じる文化がいくつか存在する。彼らは瞑想を通じて食事の内容、そして調理方法を研究する。我らはその伝統を取り入れた。オムニック僧は地元の素材を研究し、人間たちがその素材をどう思うかを理解する。もちろん、使い方について教えを請いたりもするが」

「正直、それで失敗しないのが不思議ね」

「ここに滞在した最初の者たちも、同じことを言っていた」

ゼニヤッタは笑った。その笑い声や、自らのこと、あるいはバカバカしいことを自由に笑う様子はサティヤの目に好ましく映った。

「あなたたちの信仰のこと、もっと教えて」

ゼニヤッタは顔をこちらに向ける。

「ご存知のように、オーロラは世界を知ろうとし、己の居場所を探し求めた。そうすることで己が何者かを探求しようとした」

「悟りの探求を中核とする信仰は多いわ」

「この探求こそが、我らの心の根底にある。自らを犠牲にしたオーロラは、実在という存在の在り方を超越した。我らは瞑想を通じて、彼女と同じ経験をしようとしている」

「彼女はどうなったの？」

答えるのを躊躇うかのような間があった。

「オーロラの身に起きたことを実際に目撃した者は少ない。そして当然、時が経つほど謎は深まる。彼女は美しい黄金の光に包まれ、“広がっていった”と言われている。我らもその在り方を“虹彩”と呼び、その境

地を目指す。虹彩のなかでは、我らは皆ひとつだ」

「難しいわね。もっとよく知りたい」

「ぜひそうしてくれ。食事が終わったら、案内しよう」

ゼニヤッタは昼食後、サティヤを寺院内の別の区画へと案内してくれた。そこには大量のろうそくに照らされた、オーロラの超越の瞬間を象った浅浮き彫りがあった。

見ると、石像とは違って腕が八本ある。一組は心臓の前で合掌している。多くの文化で自己と宇宙への愛と尊敬を表すポーズ。他の腕は、小さな球体に向けて伸ばされている。オーロラの後ろには、大きな球が彫られていた。興味を惹かれたサティヤは冷たく、ざらついた石を指でなぞった。

オムニック僧は身をかがめ、オーロラの浮き彫りを指先で優しくトンと叩いた。

「ひとつのものから、多くが生まれる」

そう言って彼はオーロラの腕を指し示す。

「我らは決して一面的な存在ではない。それに、多くの者が――」

ゼニヤッタの指が再び座しているオーロラの方へ移動する。

「――ひとつになれる」

虹彩のなかでは皆ひとつ、と囁くサティヤに、彼はその通り、と頷いた。

一日の勤めを終えたサティヤは、寺院の外周にある小さな建物の一つに案内された。建物は開けた作りで、そばには蓮が浮かぶ大きな池がある。簡素な敷布団と畳まれた僧衣を渡された彼女は、しばらくの間考えを巡らせた。ここでの生活は自分のルーティンからすでに大幅に逸脱してはいる。とはいえできる限りいつも通りの日々を過ごしたい。寺院の伝統は尊重すべきだが、衣服まで変えることには抵抗がある。だいたい、ゼニヤッタには自分が巡礼者ではないことを伝えたはずだ。

それでも、金と赤錆色の僧衣には心惹かれたし、布の感触は心地よかった。サティヤは自分がどうするべきか分かっていた。

翌朝、その日の活動を始めるため聖堂にやってきたサティヤを、ゼニヤッタが温かく迎えた。

「僧衣を着てくれたのか。よかった」

「本当は着たくなかったけど、心からあなた方の役に立ちたいと、その誠意を見せたくて」

サティヤの言葉に、ゼニヤッタはこともなげに答えた。

「君が本気なのは分かっている」

サティヤは初め、なかなか寺院の習慣に馴染めなかった。ここでは起床してすぐに、巡礼者たちと一緒に本堂を清掃する僧侶たちを手伝う。細かい石の破片を拾ってから、床を掃く。大きな石の破片は、数日内に到着する作業員が片付ける予定とのことだった。

残った破片を水できれいに洗い流したら、辺りに花を散らす。巡礼者たちは朝食を取ってから座布団の上に座る。サティヤは最初、瞑想が始まるのだと思いながら巡礼者たちに倣った。彼女はかつて瞑想をしようとして苦戦したことがあった。だからこそ、オムニック僧たちが巡礼者に瞑想するよう指示せず、その代わり掌に収まる大きさの金属製のオーブを配り始めたのには驚かされた。

ゼニヤッタは彼女に、自分たちもオーブを使って瞑想するのだと説明した。

「我らは
決して一面的な
存在ではない」

「壁に彫ってあったものみたい」

彼は頷く。

「君には…… 知覚のオーブを」

「あなたたちに必要なものを感じ取れるように？」

「ふむ」

サティヤの問いかけに、ゼニヤッタは肯定とも否定とも取れない声を上げ、オーブの使い方を説明し始めた。

「片方からもう片方へ、両手で転がすのだ。重みや感触、オーブの動き方に集中するように」

しばらくすると昼食の時間がやってくる。その後は雑仕事をこなし、再びオーブを使った瞑想が行われる。こうして長い一日を終えた巡礼者たちは床につく。

寺院で過ごし始めて数日経った頃、サティヤはいつの間にか自分の体が石床に敷いた薄い布団で寝ることに馴染んでいることに気づいた。僧衣にも慣れ、快適さを感じ始めていたし、さらさらとした布地が肌に触れる感覚を好きになっていた。じっとしていられなくなったり、不安を感じたりした時は、オーブを手の中で転がす。いつもより食欲旺盛であることに気づき、不思議に思ったサティヤはゼニヤッタにどういうことかと尋ねた。

「それは、君が空腹をしっかりと感じ取っているからだ。儀式や、オーブの瞑想、寺院の雑仕事にしっかり集中しているだろう？ それと同じだ」

彼は笑いながら続ける。

「こうした会話にも集中しているようだ」

滞在四日目。サティヤは僧たちと一緒に村の中心部に向かった。彼らはそこで飢えた住民のために炊き出しを行っている。サティヤは香り高い米の上にレンズ豆を掬いながら、ゼニヤッタを始めとするオムニックたちが村人たちと接する様子を観察した。村人たちは僧たちと会うことを、心から喜んでいるようだった。炊き出しでは多くの会話が交わされた。寺院のこと、虹彩のこと、オムニック僧たちの最近の様子…… 村人たちが僧たちを友と見ていることは明白だった。一方で、サティヤに怒りの視線を向ける者や、わざと聞こえるように不満を言う者もいた。

そうした声を聞いたゼニヤッタは、匙を手に取ってサティヤの隣に立ち、料理をよそい始めた。彼は特に何も言わなかったが、それだけで村人たちの態度は少し軟化した。村人たちの反応に気を悪くしていたわけではかったが、サティヤは彼の静かな気遣いをありがたく思った。

その晩、ゼニヤッタはオーブを使った瞑想を終えたサティヤに少し居残るよう伝えた。彼女は座布団の上で身じろく。石像の破片を見るたび、なんとかしたくて仕方なくなるのだ。

「今日の勤めは楽しめたか？」

「ええ。飢えに苦しむ人たちがまだあんなにいると思うと辛いけど」

サティヤは、そう答えながら再び幼少期を思い出した。ゼニヤッタもしんみりとした様子で頷き、ため息をついた。

「皆、食事中や食べ終わった後はどうしていたか、見たか？」

「ええ。話して、分け合って…… 笑っていた」

彼らの生活には恐怖、憤り、そして怒りがつきまとっているはずだ。それなのに、皆笑っていた。

「我らは丹精込めて作った料理を、無償で提供している。彼らは金を払わなくてもいいし、同じ信仰でな

くたっていい。そんなことは関係ないのだ。金や信仰がなくとも、我らは彼らと繋がることができる」

ゼニヤッタは石像を手で示す。

「炊き出しは長年、オーロラがこの地に立ち寄った時から続いているのだよ」

「皆…… 満たされた様子だった」

サティヤの指は脳内を駆け巡る思考についていこうとするように、知覚のオーブを忙しなく転がしている。

「それも、ただ空腹が満たされただけじゃない」

「飢えを満たす方法はたくさんあるぞ、サティヤ」

現実主義のサティヤは、それでも食事が一番大事だと反論する。

「確かにそうだ。肉体を満たせば、精神は自由になれる。解放され、変化し学ぶことにも寛容になる」

サティヤは手の中のつるりとしたオーブを見下ろし、口を開いた。

「硬質光建築技師は…… 感じたものを形にするのが仕事。とても正確で、精密な動きを用いる者が多いわ。私もその手法は評価している。でも…… 私自身はじっとしているのが苦手で」

オーブが転がる。掌から、掌へ。

「だから私が何かを創作するときは…… カタック舞踊の動きを使う。子供の頃、心が乱れた時に踊って気持ちを落ち着けていたわ。これを使った瞑想と――」

手中のオーブを示す。

「――似たような感覚」

サティヤはゼニヤッタと目を合わせないようにしている。硬質光を使うことが自分にとってどんな意味を持つか、口に出したことはほとんどなかった。

「まあ、舞踊の動きと言っても、覚えている範囲だけど。私の踊りはとてもじゃないけど完璧とは言えない」

「それでも、君は舞で光を紡ぐ。サティヤ、君は現実を曲げ、意義のある芸術を生み出す力を持っている。完璧な芸術など無味乾燥としているだけだ。真の芸術には、他の真なるものと同じく…… 欠陥がある。だからこそ美しい。私たちも同じだ」

ゼニヤッタは話を続ける。その金属質な声には、どこかぬくもりが感じられる。

「日本には“侘び 寂び”という美的感覚があるそうだ。不完全さを受け入れ、尊ぶ考え方だ。自然ですら完璧ではないのだから、当然芸術も完璧である必要はない。この美意識をそのまま表すような芸術技法も存在する。“金継ぎ”というのがそれで、割れてしまった陶器の破片を金で繋いで修復するというものだ」

ゼニヤッタはサティヤに視線を向ける。

「我らも金継ぎ的な考え方を身につけるべきなのだろう。壊れた部分を隠さずに、そのままの姿を受け入れることも大事だ。君の建てたものは君の熱意によって、ただの建築物にとどまらない場所になっている。なんの欠点もない家は、建物でしかないだろう？ 家はちょっとした傷や楽しい思い出によって、誰かの拠り所になっていく。君の踊りは完璧ではないかもしれない、だが踊るための想像力や創造性というのは信仰にも繋がるもの。どちらも信仰を表現する術だ。この宇宙そのものも…… 踊りによって創られたという逸話もある」

サティヤがヴィシュカー・コーポレーションに選考され、硬質光建築技師になる訓練を受け始めた頃、彼女はまだ幼く、信仰や宗教といったものをきちんと理解していなかった。もし、もしこの話をもっと早く聞けていたら――。

「実にすばらしいことだ、サティヤ」

ゼニヤッタが言う。その声からは恭しさすら感じられる。

「君ほど聖域を癒やすのにふさわしい人物はいない。君はすでに、聖なるものに触れているのだから」

サティヤは、これほど誰かに理解されたと感じたことはなかった。こんなにも無防備で、こんなにも強くなったような気持ちになれるなんて。声を張り上げて、笑って、踊って、泣いて、歌いたい。衝動を抑え込み、彼女は涙を堪えるために何度か瞬きをした。そして、ゼニヤッタに感謝を伝えるように会釈してから壊れた石像に視線を向ける。手の中で知覚のオーブを流れるように転がす。ゼニヤッタが彼女のためにこのオーブを選んだ理由が分かった。知覚とは理解すること…… 頭だけでなく、感覚を通じた理解。オーブのなめらかな表面。漂う香の匂い。細部まで気を配って作られた料理の味。耳をくすぐる、囁くような声。そして目に飛び込んでくる美しい光景。

「自分が何をすべきか、分かった気がするわ。でも時間が足りるかどうか…… ねえ、すぐにでも始めましょう」

「我らもやるのか？」

「ええ。皆ひとつに、でしょう」

サティヤは言葉を発しながら、自分が笑みを浮かべていることに気づいた。

それからサティヤの残された滞在時間のほとんどを作業に費やし、なんとかサンジェイが言うところの“除幕式”に間に合わせることができた。実際のところ、像には幕などかかっていないのだが。一大イベントのために身支度をしていたサティヤは、いつもの癖で寺院を訪れた日に着ていた紫と白の会社の制服に手を伸ばしかけたが、滞在中身に着けていた金と赤錆色の僧衣を見て動きを止めた。

サティヤと共に中庭に行こうと待っていたゼニヤッタは、僧衣を纏って現れた彼女に驚いたようだった。

「君は…… 巡礼者ではないのだろう？」

「“巡礼者とは、聖地に赴く者のこと”よ」

サティヤはゼニヤッタの言葉を繰り返す。

「確かにあの時、私は巡礼者になるつもりはなかった。でも…… 今はこうしてここにいる」

彼女は僧衣を示した。

「今日はこれを着て、オーロラについて学んだ者として作り上げたものを、世に披露したい。きっとここで得たものは一生の糧になる。一見平凡だけれど、世の中には神聖なものがたくさんあることを教わった。素晴らしい師に学ぶべきことはまだまだ多いわね」

サティヤはまさか、自分がオムニックの心の機微を察することができる日が来るとは思っていなかった。しかしどうだろう、ゼニヤッタの感激が伝わってくる。表面上の大きな変化があったわけではなかったが、感じ取れた。

二人は中庭に到着した。一週間前、サーパンチのラネシュ・グルーワルがサティヤに諫言をした場所だ。集まった寺院の僧や巡礼者、そして村人たちの中に彼の姿もあった。見た所まだ彼女を信頼してはいないらしい。

「結局、瞑想院ではなかった、ということかい？」

愛想のいい声を聞いて、サティヤは驚いて振り向く。まさかサンジェイ本人が除幕式に出席するとは思わ

なかった。

「お楽しみに」

彼はサティヤをじっと見てから頷いた。

「いいだろう。問題が発生した時のために、広報のタミールを待機させている」

「問題なんかないわ」

「どんなに手を尽くしても、お気に召さない連中ってのはいるものだ。君にも分かるだろう」

確かに彼の言う通りだが、サティヤはそれほど心配していなかった。

「リサーチは万全よ。このデザインには自信がある」

彼女は観衆に向き直り、ついてくるよう促した。彼らを先導して廊下を歩いていくと、穴が空いた壁や天井が金色に光っているのに気づいた観衆の囁く声が聞こえてくる。崩れた石の破片もひびも亀裂も、寺院が傷ついた箇所は蜂蜜色の光で繋ぎ止められ、覆い隠されるのではなく、ありのままの姿を保ったまま修復されていた。

――割れてしまった破片を金で継ぐ。

――新しいものはエネルギーに満ちているが、古きものには力が宿る。

――体を巡る血。電流。全身を繋ぐ腱。

集団は静かに小道を歩き、本堂の前にたどり着く。サティヤは入り口で立ち止まり、大きく息を吸ってから口を開いた。

「ヴィシュカー・コーポレーションは、図らずもこの寺院に損傷を与えてしまったことについて、全面的に責任を負います。私はテカルサ・ゼニヤッタに招かれ、寺院に滞在してオムニックの歴史と信仰、そしてオーロラについて学びました。お集まりの皆さんもご存じのとおり、私はこの寺院の復旧を申し出ました。これより、私が解釈したオムニック、スラヴァサの人々、オーロラ、そして彼女の寺院の姿をご覧いただきます」

――私がモンデッタや、芸術…… そして私自身をどう解釈したかを見てもらおう。

――虹彩のなかで、私たちは皆ひとつ。

ここ数日間、サティヤは寺院の人々と一致団結し働き続けた。オーロラ像の修復は彼女ひとりの力で行

われたわけではない。彼女は石の破片を撤去しにやってきた作業員たちに、破片を組み立て直すのを手伝って欲しいと持ちかけた。作業員や僧侶、そして巡礼者が集まって、硬質光で像を修復するサティヤに協力してくれたのだ。

彼らは代わりの像を作ろうとせず、元の像を変化させた。

オーロラの石像は、日光を浴びて黄金を纏っているかのようだった。ヴィシュカーの不注意で崩れた巨大なパーツは、華麗な光の線で繋がれている。金で出来ているように見える首飾りが垂れた頭と首元を繋ぐ。割れてしまった石の僧衣も、深い愛情を込めて合わせられた手の指も、硬質光によって元の場所に納まっている。

虹彩がもたらす団結の精神には感銘を受けたが、それよりもサティヤの心の奥底に響いたのは、オーロラが超越した瞬間の物語だった。まだやらなければならないことがある。彼女は腕を上げ、心を落ち着けてから光を撚り合わせ始めた。

なにもない空間に伸ばされた指先が、何かを感じ取り、摘み、引き出す。

――オーブが転がる。掌から掌へ。

――次第に意識が変わっていく。

サティヤは金色の光の糸を指の間で引き伸ばし、丸めながら、オーロラが感じたであろう感嘆、混乱、戸惑い、そして感情を持った最初のオムニックが抱いた、たった一つの命を捧げられるほどの大きな愛に思いを馳せた。そして彼女もまた、芸術と熱意に自らを捧げ――創造の舞いに身を任せた。

体が素早く流れるように動き始める。像には、まるで黄金の影かのように一体と化した優美な八本の腕。石像の腕は、一対が他者を引き上げるため下に伸ばされ、その上の一対は探求者を祝福し迎え入れるため開かれている。そして最後の一対の腕は、胸の前のものと同じように合掌し、頭上に掲げ、団結を表している。その数と同じ八つの小さなオーブが現れ、二つが石像の頭を挟むように浮かび上がった。

――最後の仕上げを。

サティヤは再び光を撚り始め、石像の周りに巡らせる。糸は透明に見えるほど細く、石像の重い台座の下に滑り込んでいく。まるで炎のような輪が重なり合い、石像は輝くオーブに包み込まれた。サティヤが両手を挙げると、覆う金色の硬質光でできた透明な球体は像ごと蓮の花から浮かび上がり、観衆は息を呑んだ。

サティヤは息を吐きながら腕を下ろした。

しばしの沈黙ののち、静かな話し声が聞こえ始めた。人々は徐々に光る球の中に浮かぶ像に近寄っていく。像を見上げる彼らの顔は光に照らされていた。

「ミス・ヴァスワニ」

声をかけられて振り向くと、サーパンチ・グルーワルが笑みを浮かべてそばに立っていた。

「あなたを誤解していたようだ、どうか許してくれ。これ以上完璧なことはない」

「いいえ、そんなことないわ。でも、それでいい」

サティヤは不思議そうにしているグルーワルに丁寧に会釈し、群衆を掻き分けてその場を去った。すでにその場を狭苦しく感じ始めていた。

外ではゼニヤッタが待っていた。彼は小さな箱を差し出す。

「私たちのことをいつでも思い出せるように」

箱からいい香りが漂ってくる。お香が入っているようだ。

「最高の贈り物よ。ありがとう」

「いつでもまた訪ねてくるといい」

ゼニヤッタはサンジェイが近づいてきているのに気づき、声をかける。

「夜が明けるたび、新たな道を選ぶことができる。ヴィシュカー・コーポレーションもそれを理解してくれただろうか」

彼は頭を垂れ、中庭へと戻っていった。サンジェイはその後ろ姿を見送り、サティヤに向き直った。

「こいつは予想外だったな」

「失望した？」

サンジェイは首を横に振る。眉間にシワを寄せているが怒っているようには見えない…… 困惑しているのだろうか？

「いや、そうじゃない。確かに、彼らに望むものを与えろと言ったからな。サティヤ、君は…… 私の期待に応えてくれた。それも、この場所にふさわしい、実に美しい方法で。だがひとつ聞かせてくれ。どうしていつもの青い光ではなく、黄色い光を使った？」

「オーロラが超越したとき、黄金の光が溢れたと聞いたものだから。それに…… この寺院は、自己犠牲という究極の愛を忘れないために建てられた場所。青は美しくも冷たい色。愛は…… 温かいものでしょう？」

住民たちが笑顔を浮かべてサティヤの方を見ているのを、サンジェイは見逃さなかった。

「ここにずいぶん思い入れができたようだな」

「ここの人々とはものの考え方が似ているから、離れるのは少し寂しい。だけど、たとえ考え方を理解しなくても、相手を尊重することはできると教わったから」

口には出さないが、胸中で“友にだってなれる”と呟いた。

「だから私は、この寺院が今の姿で存在しているという事実だけで十分」

――道は、歩む者の足元に少しずつ作られていく。

「私たちは相手を尊重し、友として歓迎しながら交流すべきなんだわ。相手を理解し…… 理解してもらう努力を続けながら。ヴィシュカーがこの土地のためにできることは多いけれど、まずはどうやってそれを実現するかを理解しなければ」

サティヤはサンジェイに向き直ってそう訴えた。サンジェイは当惑したような顔で、かつてと同じ姿でありながらすっかり様変わりした輝く像を振り向く。口を開いた彼の声は柔らかく、驚いているようにも聞こえた。

「そうだな。君の言う通りかもしれない」

STONE BY STONE

BLIZZARD®
ENTERTAINMENT

© 2020 Blizzard Entertainment, Inc.
ここで言及されているすべての商標は、それぞれの所有者に帰属します。